

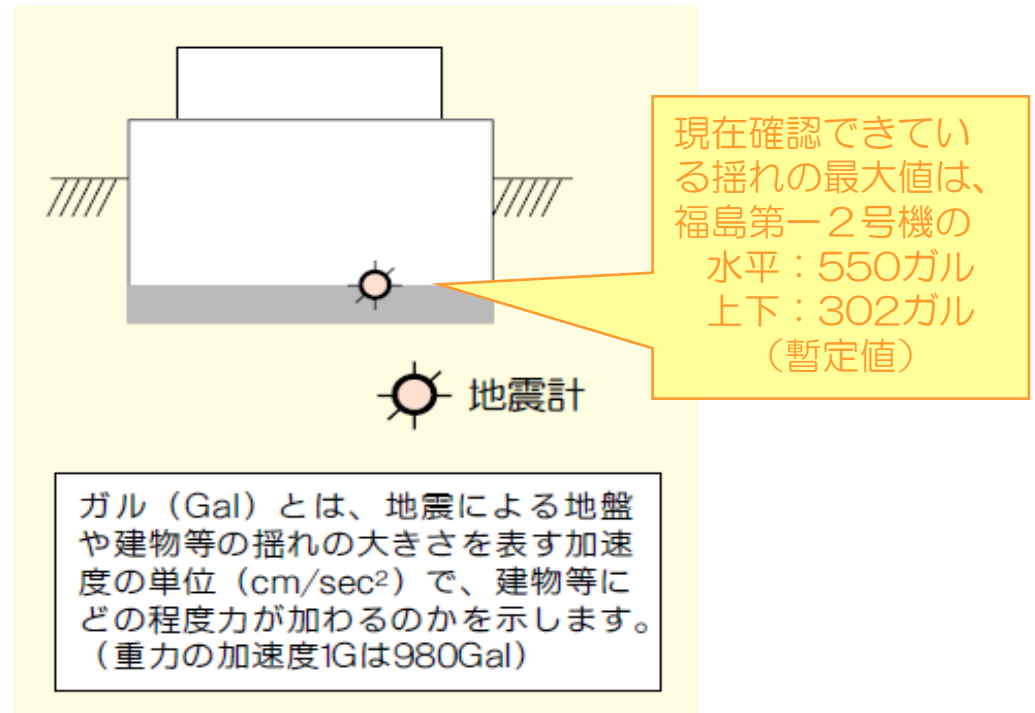
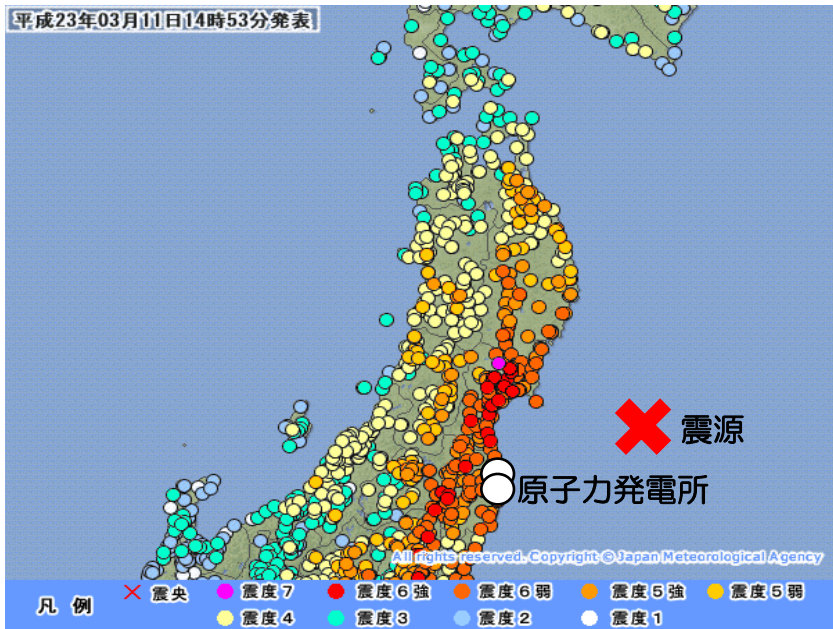
東日本大震災における 原子力発電所の影響と現在の状況について

平成23年4月18日
東京電力株式会社

1. 東北地方太平洋沖地震

- 発震日時 ; 2011年3月11日(金) 午後2時46分頃
- 発生場所 ; 三陸沖(北緯38度、東経142.9度)、震源深さ24km、マグニチュード9.0
- 各地の震度 ;
 - 震度7 : 宮城県栗原市
 - 震度6強 福島県楢葉町、富岡町、大熊町、双葉町
 - 震度6弱 宮城県石巻市、女川町、東海村
 - 震度5弱 新潟県刈羽村
 - 震度4 青森県六ヶ所村、東通村、むつ市、大間町、新潟県柏崎市

【震源との関係】

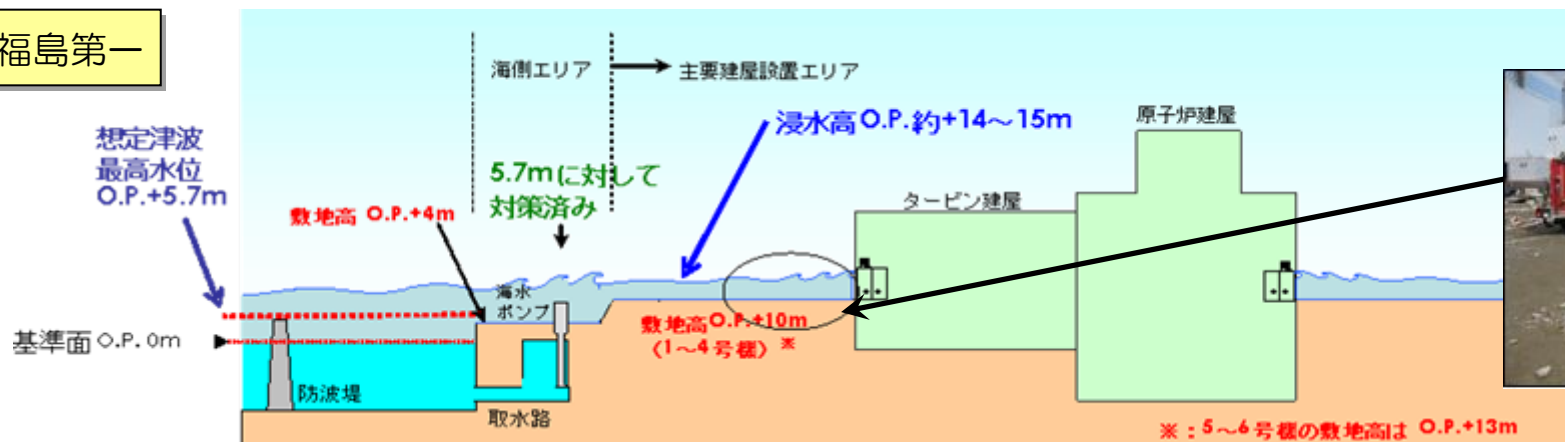


2. 津波の大きさ

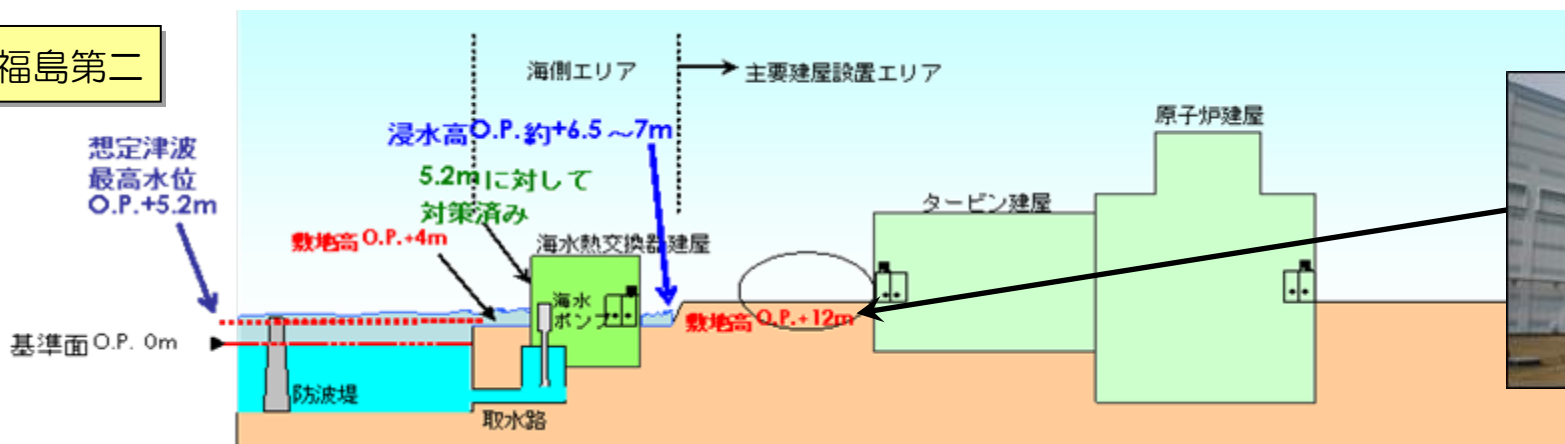
- 平成14年改訂の想定津波最高水位は基準面（O.P.）に対し5.7m、対策は完了していた。
- 今回、福島第一では、主要建屋設置エリアほぼ全域が、浸水高O.P.約+14-15m、深さ約4-5m浸水。
- 一方、福島第二では、海側エリアにおいて浸水高O.P.約+6.5-7m、主要建屋設置エリアにおいては1,2号機の建屋周辺および3号機の建屋南側のみ浸水。
- 福島第一への津波の影響は、福島第二のものに比べ、大きかったことが確認された。

4月9日記者発表

福島第一

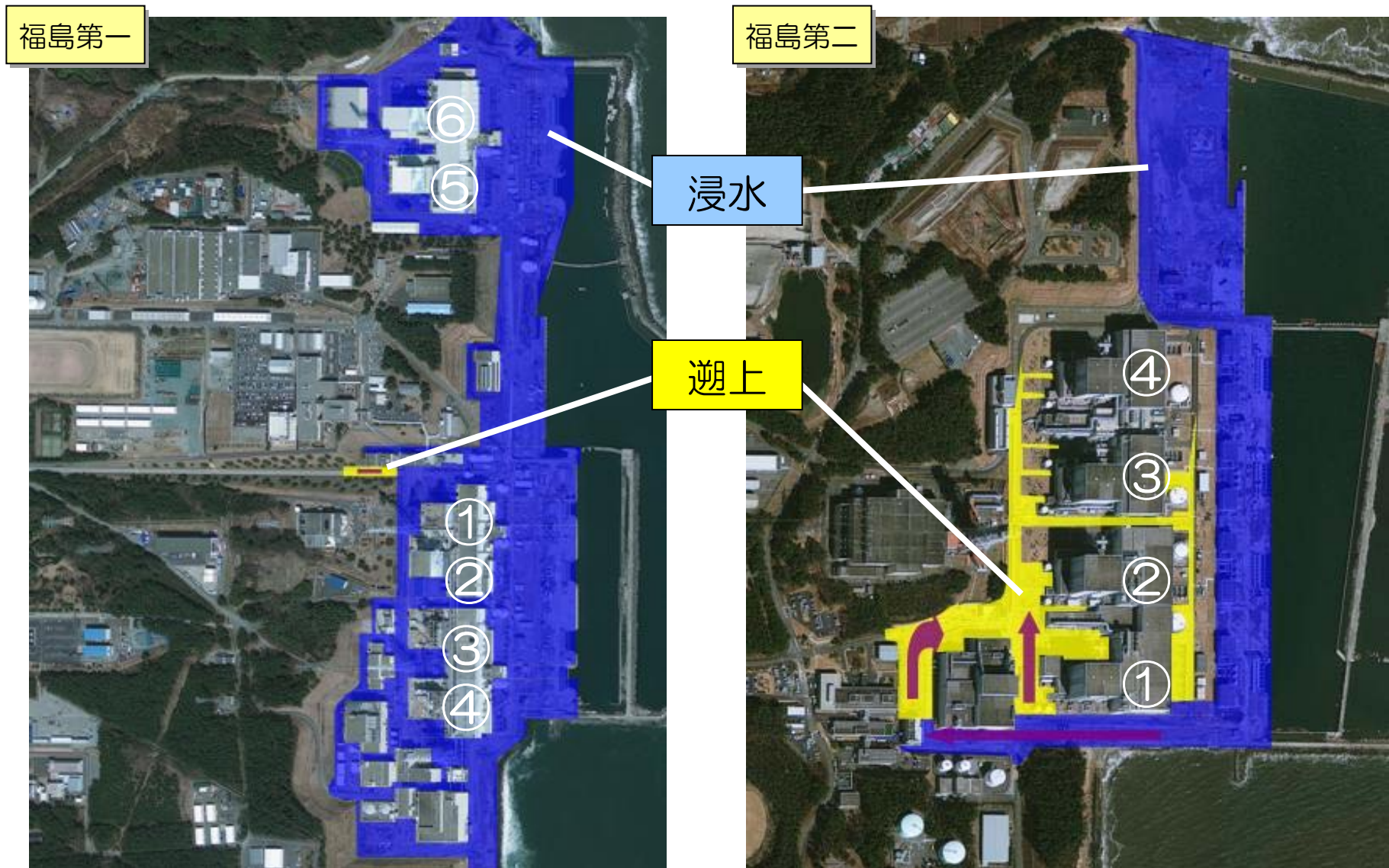


福島第二



O.P.: 小名浜港工事基準面

3. 福島第一・第二の浸水、遡上の領域



4. 事故の概要

■地震発生： 2011年3月11日（金）午後2時46分頃

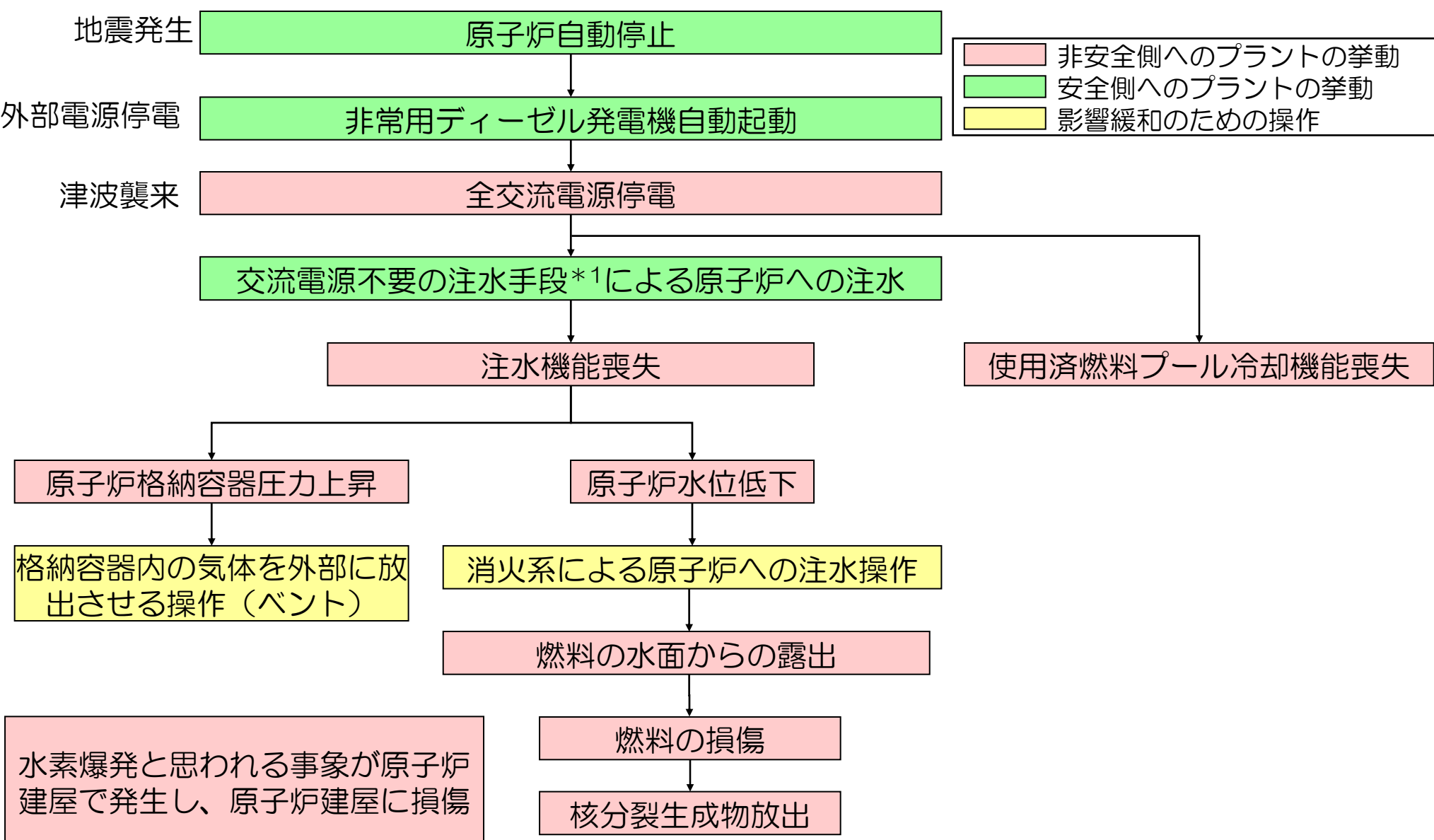
■福島第一原子力発電所：

- 運転中の1～3号機が自動停止（4～6号機は定期検査中のため冷温停止中）
- 地震により外部電源が喪失し、非常用交流電源が起動するも、その後津波により喪失
→現在は外部電源復旧、中央制御室の照明が点灯（全号機）、タービン建屋の一部の照明が点灯（1～4号機）
- 燃料を冷却する機能が不十分。当初は淡水による冷却を行い、その後、海水（一部ホウ酸入り）を注入
→現在は仮設電動ポンプ等により淡水を注水（1～3号機）
- 1～3号機で、原子炉格納容器内の過大な圧力を防止するため、格納容器内の圧力を降下させる措置（ベント）を実施
- 水素爆発と思われる事象が原子炉建屋で発生し、原子炉建屋に損傷を確認（1,3号機）
- 圧力抑制室付近で異音が発生するとともに同室の圧力が低下（2号機）
- 大きな音が発生し、原子炉建屋に損傷を確認（4号機）
- 1～3号機のタービン建屋等で、高濃度の放射性物質を含む多量の溜まり水を確認、2号機トレンチを通じて、海洋への漏えいを発見、4月6日止水成功。溜まり水の排水作業実施中。極めて高線量の2号機の溜まり水を集中環境施設へ移送し保管するために、集中環境施設の低レベル水約1万トン海洋に放出。
- 5,6号機、冷温停止中

■福島第二原子力発電所：

- 運転中の1～4号機が自動停止
- 冷温停止中、水位は制御範囲内で安定、外部電源は受電有（全号機）

5. 福島第一原子力発電所の事象の経過（3号機の場合）



* 高圧注水系、原子炉隔離時冷却系

6. 設備の現況（福島第一原子力発電所）

- 1～3号機の原子炉内の燃料の冷却のため、仮設電動ポンプにより淡水注入中。
- 1～4号機の使用済燃料貯蔵プール内の使用済燃料の冷却のため、淡水による上部からの放水または燃料プール冷却材浄化系ラインからの注入を実施中。
- 1～3号機のタービン建屋内に高濃度汚染水を確認。復水器等への排水作業中。
- 1号機、格納容器内に窒素注入中。万一の水素爆発の防止のため。今後2，3号機にも注入する。
- 5，6号機は冷温停止中。

		1号機	2号機	3号機	4号機	5号機	6号機
生 地 震 発	運転状況	運転中	運転中	運転中	定期 検査中	定期 検査中	定期 検査中
現 況	「止める」		○	○	○	—	—
	「冷やす」	原子炉	△ 淡水注水	△ 淡水注水	△ 淡水注水	— 燃料取出中	○ 冷温停止中
		プール	△	△	△	△	○ 冷温停止中
	「閉じ込める」※		× 高濃度汚染水 確認	× 高濃度汚染水 確認	× 高濃度汚染水 確認	△	○

※ 1,3,4号機は原子炉建屋上部に損傷あり。2号機は圧力抑制室の閉じ込める機能に異常がある可能性あり。5,6号機は水素ガス滞留防止のため、原子炉建屋屋根部に穴あけ実施。

7. 設備の現況（福島第二原子力発電所）

- 地震発生時に、運転中であった1～4号機は全て自動停止。
- 外部電源は確保されたが、津波により1,2,4号機の原子炉の除熱機能が喪失。その後、除熱機能を回復し、冷温停止。
- 3号機は地震後順調に冷却が進み、地震発生後約22時間で冷温停止。

		福島第二原子力発電所			
		1号機	2号機	3号機	4号機
地震発生時	運転状況	運転中	運転中	運転中	運転中
現況	「止める」	○	○	○	○
	「冷やす」	○ 冷温停止中	○ 冷温停止中	○ 冷温停止中	○ 冷温停止中
	「閉じ込める」	○	○	○	○

8. 福島第一：燃料冷却の取り組み

凡例：

原子炉関係

プール関係

電源関係

1号機

2号機

3号機

4号機

5/6号機

共用プール

3月11日14:46

地震発生

12日
13日
14日
17日
20日
21日
22日
24日
25日
26日
29日
30日
31日

11 淡水による冷却

11 淡水による冷却

11 淡水による冷却

12 海水注入開始

14 海水注入開始

13 海水注入開始

17 放水開始
(海水・淡水)

20 海水注入開始



20 放水開始
(海水・淡水)

D/G
一部運転

20 冷温停止

20~21
外部電源に
切替

21 淡水注水



24 中操照明復帰

22 中操照明復帰

22 P/C受電

24 外部電源
供給

24 本設系統による冷却開始

25 淡水切替

26 中操照明復帰

26 淡水切替

25 淡水切替

29 淡水切替

29 淡水切替

29 中操照明復帰

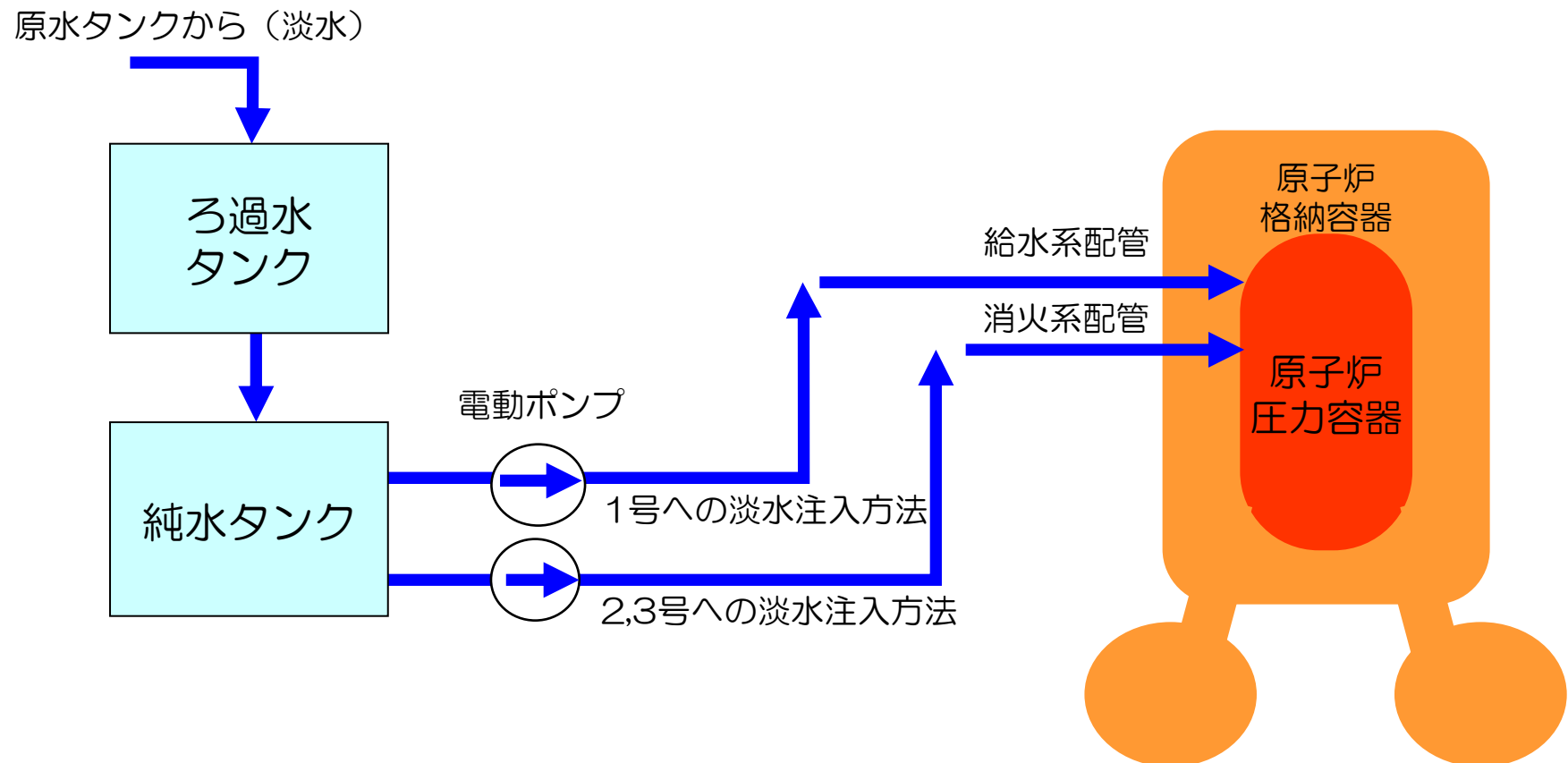
30 淡水切替

31 淡水放水開始



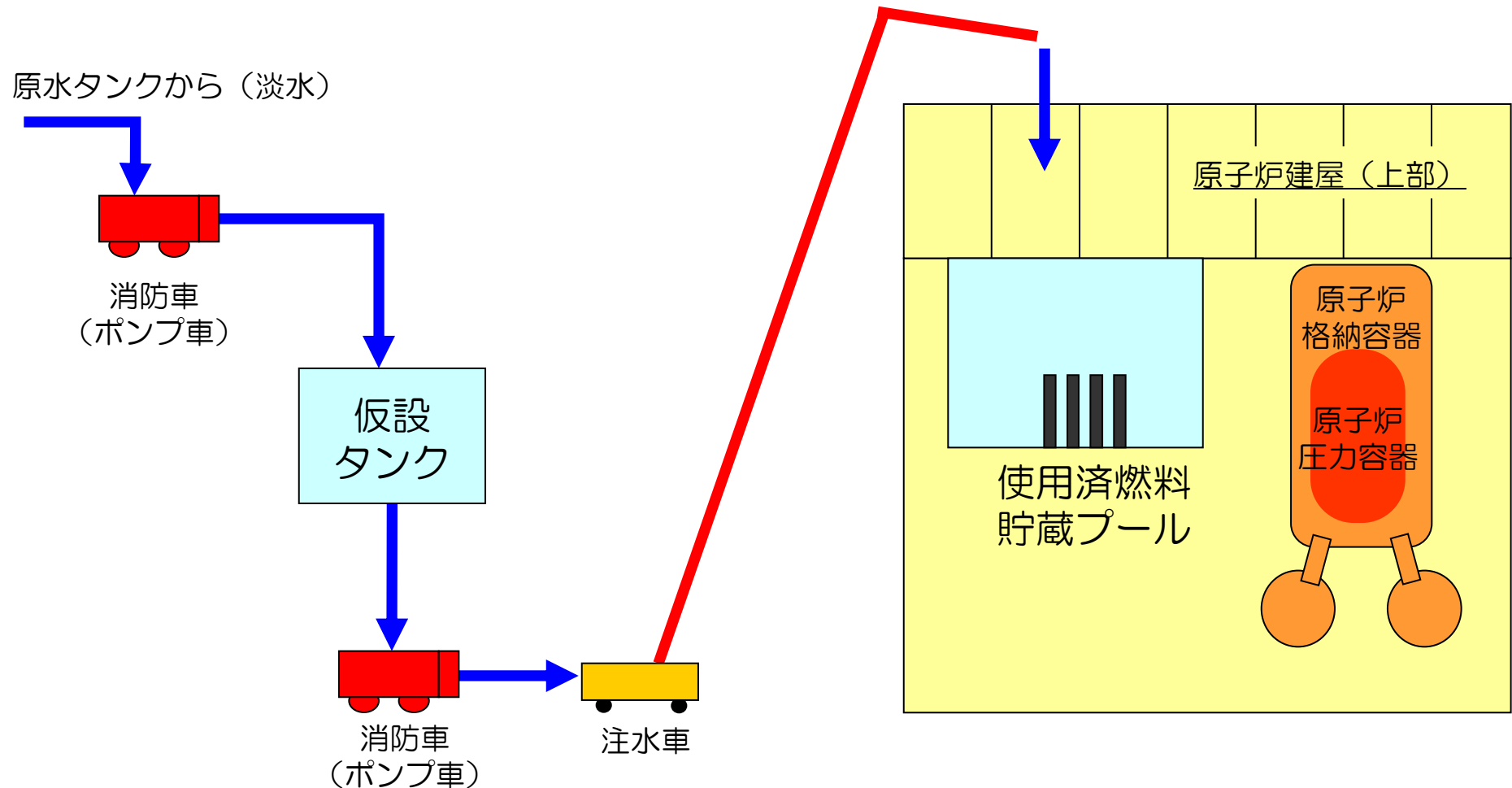
9. 原子炉への注水イメージ図

- 地震発生後、淡水による冷却を行い、その後、海水（ホウ酸入り）による冷却を行っていたが、淡水による冷却を再開



10. 使用済燃料プールへの注水イメージ図

- 地震発生後、一時海水による冷却を行っていたが、淡水による冷却を再開
- 今後も使用済燃料プールの状況を確認しながら、必要に応じて放水・注水を実施していく



1 1. 復旧状況（中央制御室照明点灯）

- 復旧の第一歩の象徴となる中央制御室の照明が順次点灯
 - 3月22日22:45 3号機中央制御室照明点灯
 - 3月24日11:30 1号機中央制御室照明点灯
 - 3月26日16:46 2号機中央制御室照明点灯
 - 3月29日11:50 4号機中央制御室照明点灯



点灯した1号機中央制御室照明
(照明カバーが地震の影響で外れている)



点灯した4号機中央制御室照明

1 2. 福島第一原子力発電所の溜まり水の対応

➤ 1～3号機のタービン建屋等で、高濃度の放射性物質を含む多量の溜まり水を確認。安定した状態で保管するために、下記対策を実施

- ✓ 溜まり水を復水器へ移送し保管するために、復水器の低レベル水を外部タンクへ移送 (①)
- ✓ 極めて高線量の2号機の溜まり水を集中環境施設へ移送し保管するために、集中環境施設の低レベル水約1万トンを海洋に放出 (②)

(低レベル水1万トンの放射能は、2号機の高レベル水10リットルと同程度で、公衆への影響は小さいと評価)

<2号機溜まり水の状況(4月14日現在)>

集中環境施設

・場所: 2号機トレンチ内
・ヨウ素131: 6.9×10^6 Bq/cm³
・セシウム137: 2.0×10^6 Bq/cm³
(3/30 8:50測定)

原子炉建屋

タービン建屋

復水器

移送予定

①
復水貯蔵
タンク

サプレッション
プール水サージタンク

②
低レベル水
放出

止水実施

立坑

溜まり水

トレンチ

1 3. 放射性物質の拡散防止対策

- 地面の放射性物質の飛散を防ぐため、飛散防止剤を試験的に散布
(4月1日以降、断続的に実施)
- 放射性物質を含む液体の海への流出を防ぐため、下記対策を実施
 - ✓ 立坑周辺の穴から凝固剤を注入。ピット側面コンクリート部分から海への流出が止まったことを確認
(4月6日 5:38頃)
 - ✓ 止水状況をさらに完全なものとするため、流出箇所に対して、ゴム板と治具による止水対策を実施。
 - ✓ 引き続き漏えいの有無を監視中。
- 発電所専用港内からの放射性物質を含む水の流出を防ぐため、下記対策を実施
 - ✓ 発電所南側の防波堤周辺で大型土のうの積み込みによる止水工事を開始。
 - ✓ 発電所南側の防波堤付近やスクリーン前面にシルトフェンス等を設置。
 - ✓ ゼオライトを詰めた土嚢をスクリーン前面に投入。



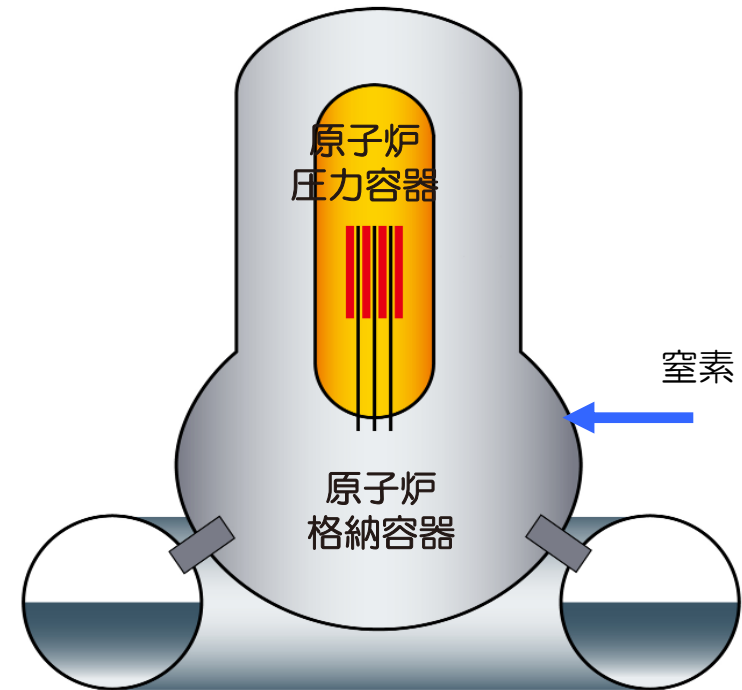
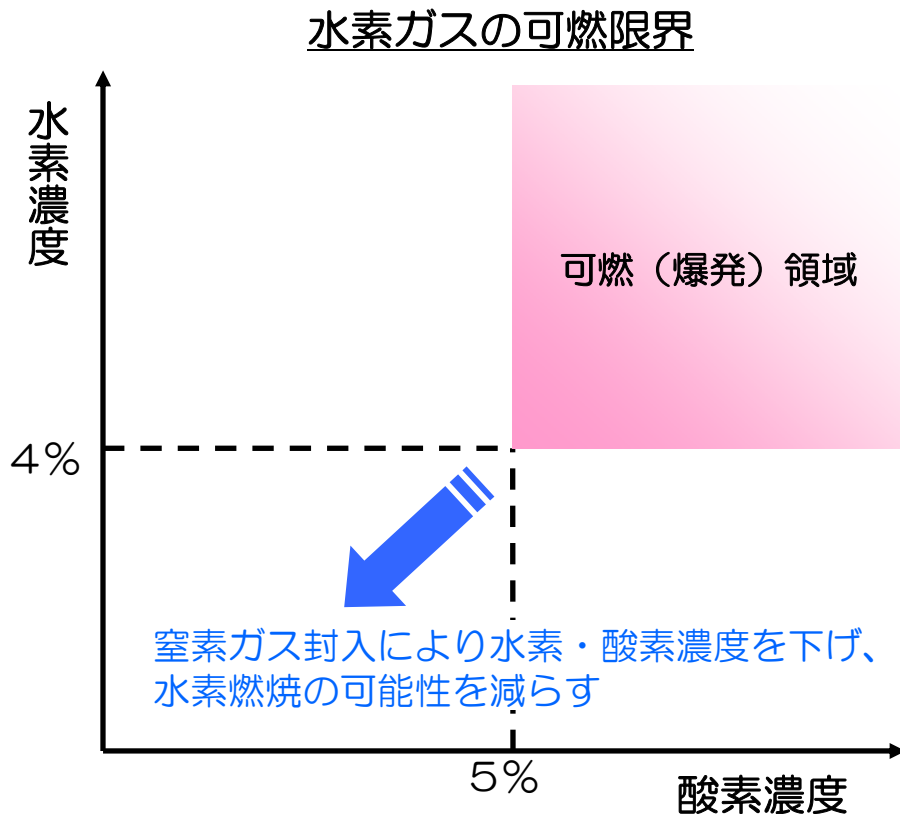
飛散防止剤散布



凝固剤注入による止水対策

1 4. 原子炉格納容器への窒素封入

- 原子炉格納容器内に水素ガスが蓄積している可能性があることから、4月6日より窒素ガスの封入を実施中（1号機）
- 今後、2，3号機の封入も実施予定



1 5. I N E S（国際原子力・放射線事象評価尺度）評価

➤ 4月12日原子力安全・保安院が下記について発表

- ・ 福島第一原子力発電所の事故・トラブルに対する I N E S 評価について、レベル7と暫定評価
- ・ ただし、放射性物質の放出量は、同じレベルのチェルノブイリ事故の1割程度

➤ 当社としては、一日でも早く事態を収束させたいと考えており、原子炉の冷却、放射性物質の飛散防止等を鋭意進めている。今後とも、政府・関係各省庁、自治体のご支援とご協力を仰ぎながら、緊密に連携をはかりつつ、事態の収束に向けて全力を挙げて取り組んでいく。

	福島第一での想定放出量		(参考)
	保安院概算	安全委員会発表値	チェルノブイリでの放出量
ヨウ素 131 …(a)	13 万テラベクレル ($1.3 \times 10^{17}\text{Bq}$)	15 万テラベクレル ($1.5 \times 10^{17}\text{Bq}$)	180 万テラベクレル ($1.8 \times 10^{18}\text{Bq}$)
セシウム 137	6 千テラベクレル ($6.1 \times 10^{15}\text{Bq}$)	1 万 2 千テラベクレル ($1.2 \times 10^{16}\text{Bq}$)	8 万 5 千テラベクレル ($8.5 \times 10^{16}\text{Bq}$)
(ヨウ素換算値) …(b)	24 万テラベクレル ($2.4 \times 10^{17}\text{Bq}$)	48 万テラベクレル ($4.8 \times 10^{17}\text{Bq}$)	340 万テラベクレル ($3.4 \times 10^{18}\text{Bq}$)
(a) + (b)	37 万テラベクレル ($3.7 \times 10^{17}\text{Bq}$)	63 万テラベクレル ($6.3 \times 10^{17}\text{Bq}$)	520 万テラベクレル ($5.2 \times 10^{18}\text{Bq}$)

INESレベル7相当量

数万テラベクレル超
(10^{16}Bq 超のオーダー)

出所：原子力安全・保安院

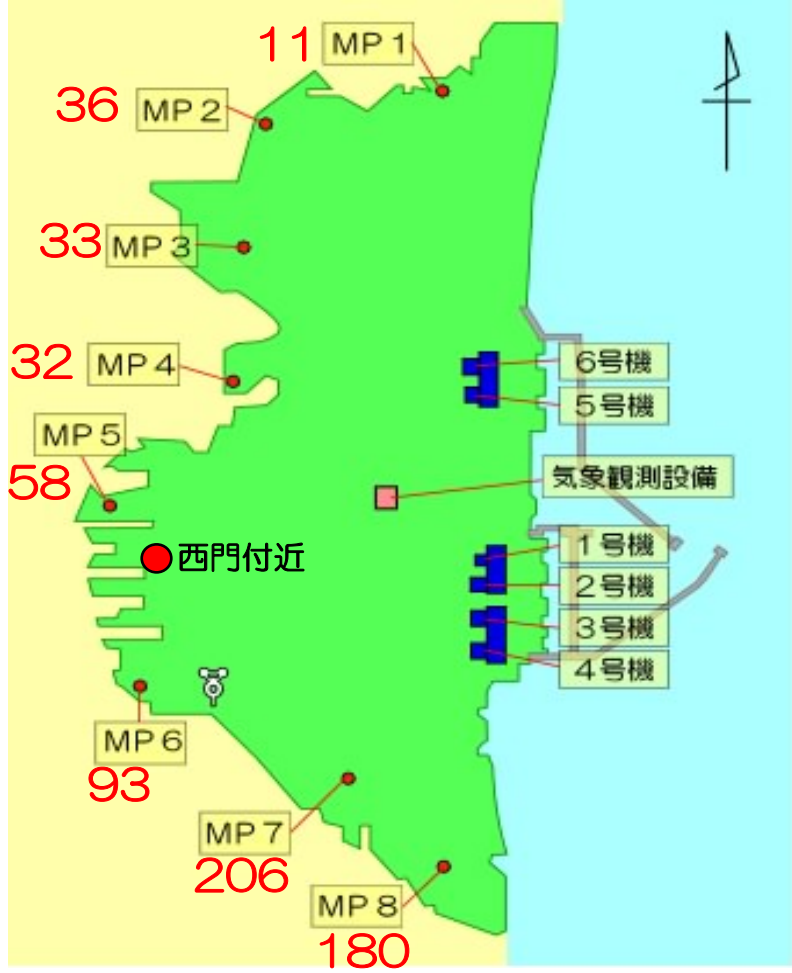
16. モニタリングデータ（福島第一原子力発電所敷地周辺）

- 福島第一原子力発電所敷地周辺の線量計測結果
- 引き続き周辺環境のモニタリングを継続監視

モニタリングポスト空間線量率

平成23年4月15日9:00

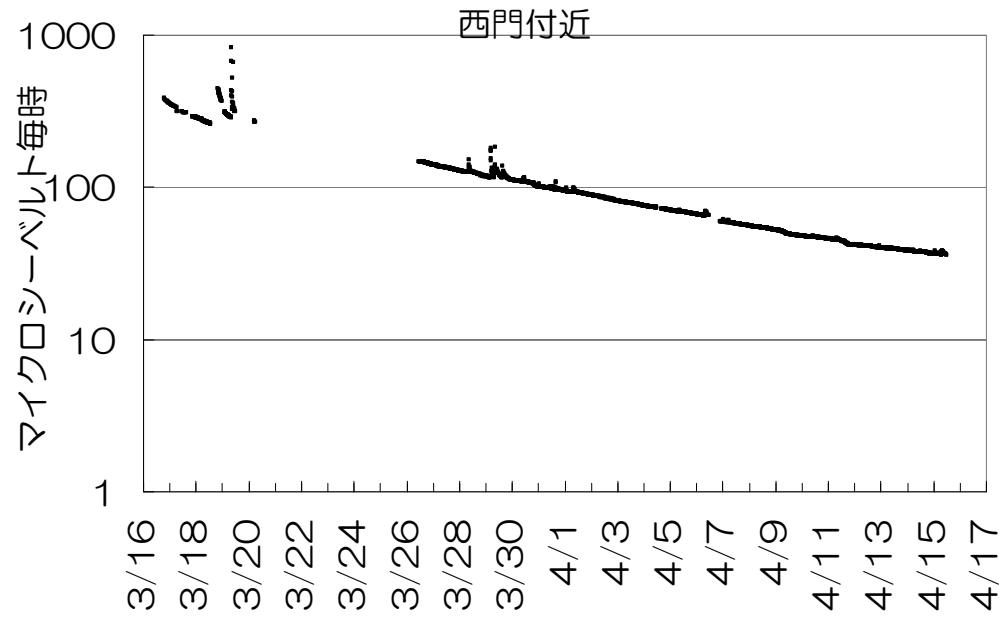
単位：マイクロシーベルト毎時



発電所周辺地域の線量

福島第一（最大値）
3号機周辺:約400ミリシーベルト毎時(3/15 10時頃)
敷地境界：約12ミリシーベルト毎時(3/15 9時頃)
福島第二：0.03～183マイクロシーベルト毎時

福島第一発電所敷地境界での線量率推移

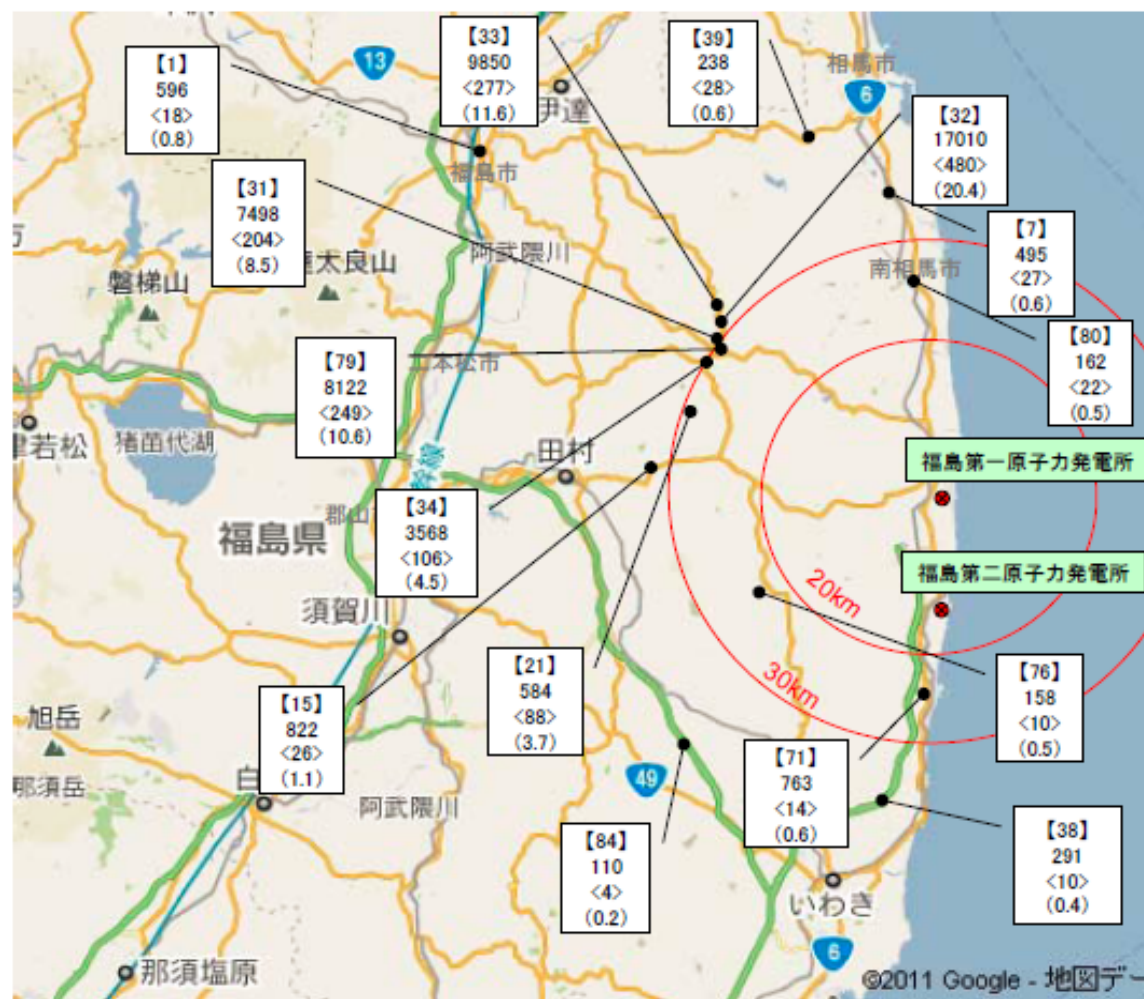


17. モニタリングデータ（福島第一原子力発電所周辺）

➤ 福島第一原子力発電所周辺地域の積算線量結果（4月16日10時）

出所：文部科学省Webサイトより

福島第一原子力発電所周辺の積算線量結果



測定日時

- ・3月23日～4月15日
(測定エリア:31～34)
- ・3月23日～4月13日、4月15日
(測定エリア:7)
- ・3月23日～4月11日、4月14日～4月15日
(測定エリア:79)
- ・3月23日～28日、4月3日～4月15日
(測定エリア:71)
- ・3月24日～4月15日
(測定エリア:1)
- ・3月24日～4月11日、4月13日～4月15日
(測定エリア:15)
- ・3月25日～4月1日、4月3日～4月15日
(測定エリア:84)
- ・3月31日～4月1日、4月3日～4月15日
(測定エリア:38)
- ・4月1日～4月13日、4月15日
(測定エリア:39)
- ・4月2日～4月11日、4月13日～4月15日
(測定エリア:76)
- ・4月3日～4月13日、4月15日
(測定エリア:80)
- ・4月8日～4月12日、4月13日～4月15日
(測定エリア:21)

●測定箇所

(凡例)

【ポイント番号】

積算線量※

<前回取得日時からの増加量>
(1時間当たりの平均線量)

※積算線量については、各測定開始から4月15日までの約7日間～23日間の積算である。

単位:マイクロシーベルト

(マイクロシーベルト/時)

1 8. 敷地内・敷地付近の核種分析データ

- 3月21日以降に採取した発電所敷地内の土壌からプルトニウムを検出
- 今回検出されたプルトニウムは、通常的环境土壌中の濃度レベルであり、人体に問題となるものではない。念のため、発電所構内およびその周辺の環境モニタリングを強化

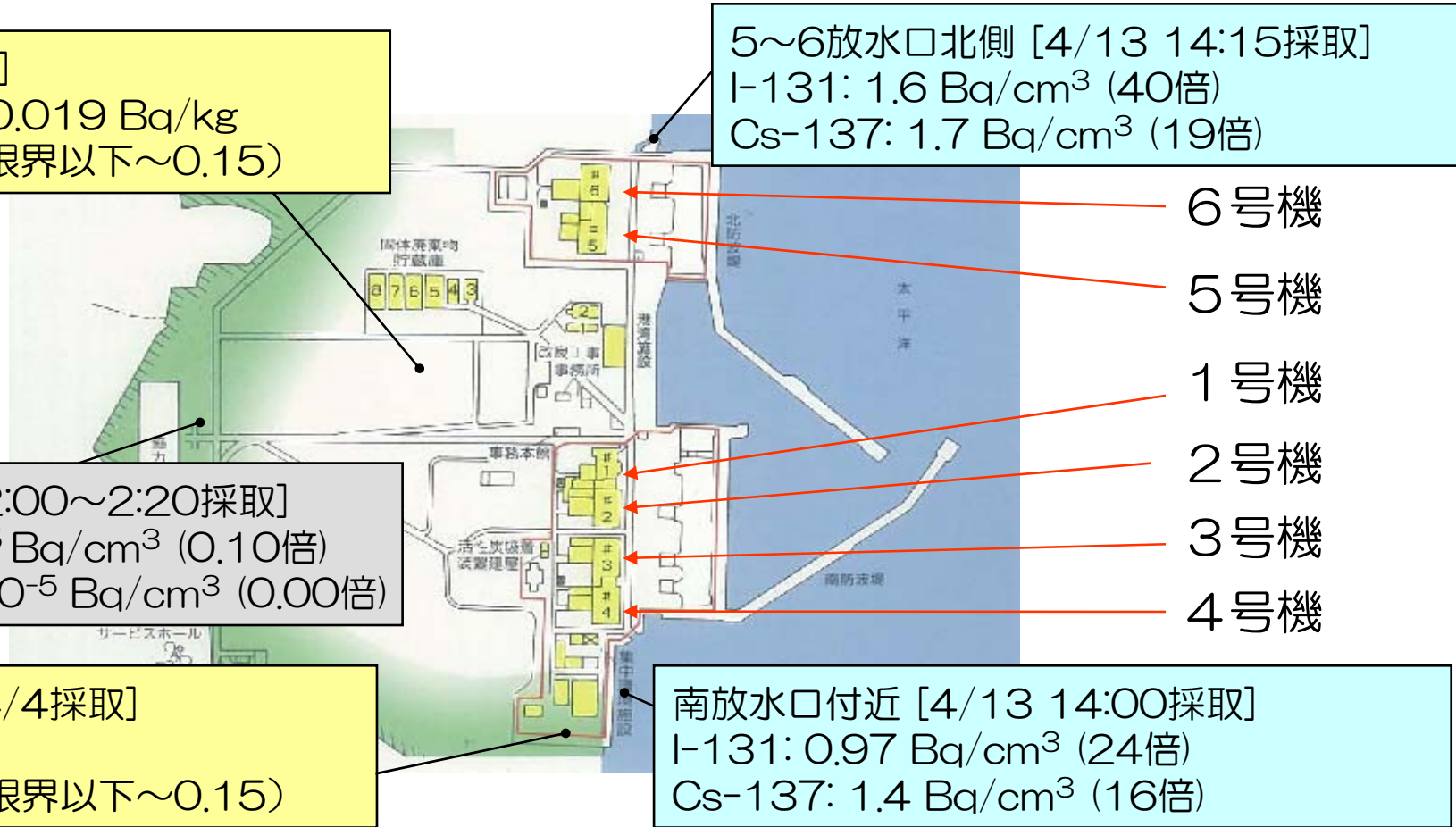
グラウンド[4/4採取]
Pu-238: 0.21 ± 0.019 Bq/kg
(通常値は、検出限界以下 ~ 0.15)

西門付近 [4/13 2:00 \sim 2:20採取]
I-131: 9.7×10^{-5} Bq/cm³ (0.10倍)
Cs-137: 1.1×10^{-5} Bq/cm³ (0.00倍)

産廃処分場近傍 [4/4採取]
Pu-238: 検出せず
(通常値は、検出限界以下 ~ 0.15)

5 \sim 6放水口北側 [4/13 14:15採取]
I-131: 1.6 Bq/cm³ (40倍)
Cs-137: 1.7 Bq/cm³ (19倍)

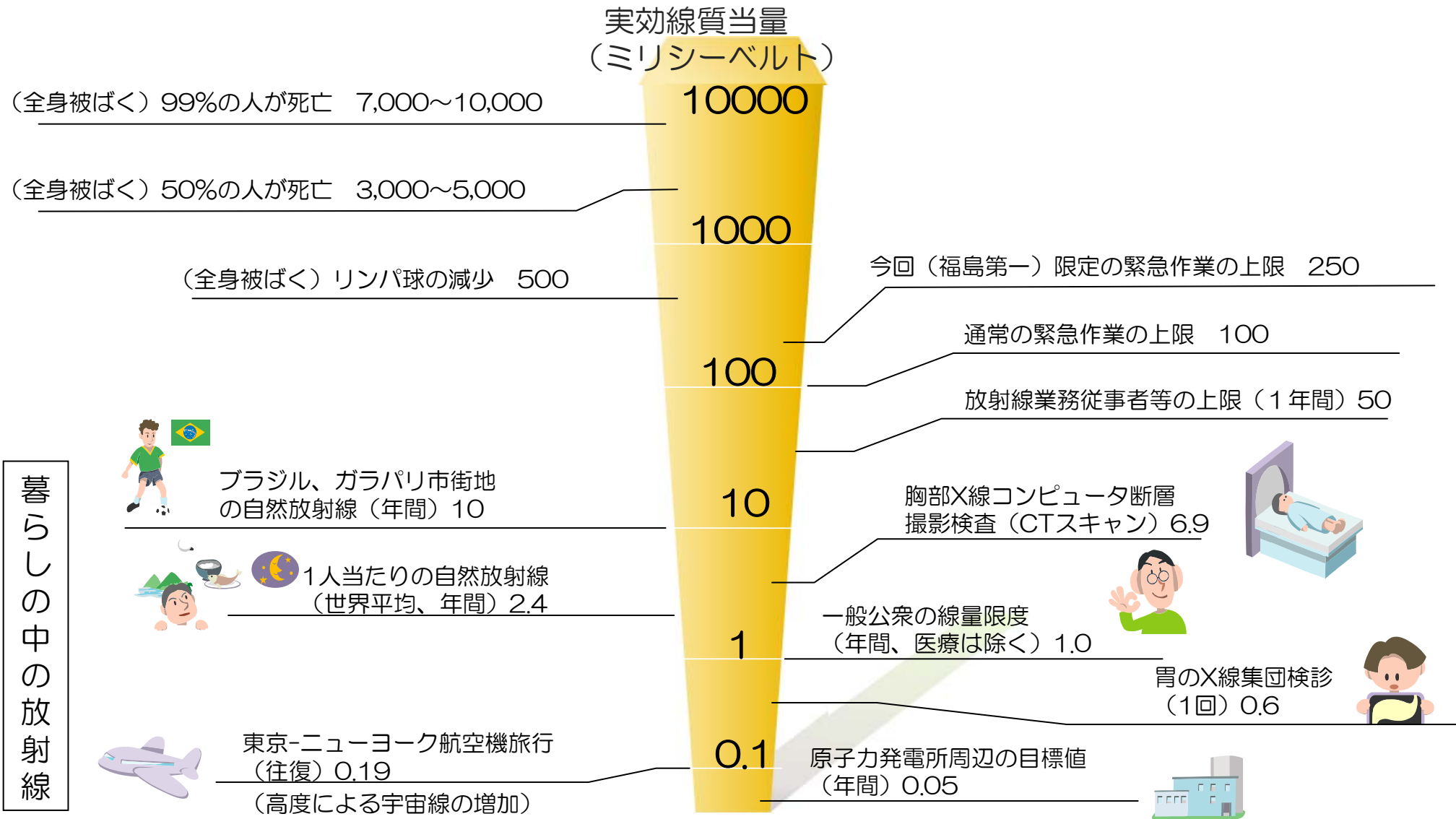
南放水口付近 [4/13 14:00採取]
I-131: 0.97 Bq/cm³ (24倍)
Cs-137: 1.4 Bq/cm³ (16倍)



※検出核種のうち、代表的な核種の濃度を記載
(括弧内の倍率は法令の濃度限度との比)

(□: 海水、 □: 空気、 □: 土壌
I: ヨウ素、Cs: セシウム、Pu: プルトニウム)

19. 放射線量と健康被害の関係



注) 自然放射線の量については、呼吸によるラドンの効果を含めた場合の値。
【出典】UNSCEAR 2000 Report, "Sources and Effects of Ionizing Radiation" ほか